

## 東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議（第3回）議事録

○日 時：平成27年5月21日（木）13:30～15:30

○場 所：杉妻会館 3階 百合の間

○出席者：別紙出席者名簿のとおり

○要 旨：以下のとおり

### 1 開 会

### 2 議 事

#### （1）施設の機能と具体的な内容について

（事務局）

資料1及び前回会議議事録に基づき、前回会議における主な意見等について説明。

※質疑応答なし。

（事務局）

資料2に基づき、施設の機能と具体的な内容の検討項目について説明。

（小沢会長）

・まずは、記録や資料の収集保存（資料エリア）から検討したい。

（圖師委員）

- ・検討すべき項目として、他地域からの支援、ボランティアがある。また、原子力発電所事故に関する資料をどのような形でどの程度まで取り込むのか、または、他機関との連携で参照できるようにしていくのかが課題としてある。
- ・今後、廃炉等の取組が研究開発として進んでいくが、かかる情報をどのように取り込んでいくかも課題としてある。
- ・収集すべき情報としては、原子力発電所関係のもの、放射線量推移、被ばく情報についても検討が必要である。また、諸機関が進める研究開発の成果も取り込むのか、または、連携で参照できるようにするのか、課題としてある。
- ・情報発信について、対象を意識し、どのように発信するのも大切なので、発信先のターゲットや発信方法なども検討項目としてある。

(藤沢委員)

- 様々な民間団体が福島県を支援しているので、また、今後の支援の参考にもなると思われるので、活動報告書やレポートなど、企業やNPOなどの支援活動記録を収集してはどうか。
- グーグルやヤフーなども、福島の支援活動について非常に多くの情報を保有しているので、これらについても収集するとよい。ただし、著作権の問題もあるので、権利関係から収集・保管が難しい活動記録のデジタルコンテンツについては、先方の協力を得て、施設内からインターネット検索をすることにより、当該活動記録に簡単にアクセスできるようにしてはどうか。
- 海外に福島をどのように発信していくのかを考えることは今後も重要なことである。また、海外で福島がどのように報じられているのかを把握することも重要であることを付言したい。

(中田委員)

- 震災の客観的な事実はどのようなものか、それが福島に何をもたらしたか、そしてどのような対応がなされたか、フェーズごとに考え、各々の視点のマトリックスをイメージして、記録や資料を収集するとよいのではないかと考えた。
- 産業面や経済面からの視点だけではなく、高齢者や女性や子供など、社会的弱者の視点、意見がなかなか出てこない層の視点で、記録や資料を収集することも必要である。
- 原子力災害は通常の災害と性格が異なる。それが何をもたらしたのかを考える必要がある。よって、記録や資料の収集に際しては、収集対象や収集手段とともに、何をどのように伝えるのかについて考える必要がある。
- 福島では、岩手及び宮城と比較し、補償や損害賠償を求める訴訟事案が少ないことを知り、意外なことに感じた。これは、前例がないということに由来する。原子力災害を始めとした、人類史上これまでにない複合型災害の難しさを感じた。
- 報道や震災当時のACのコマーシャルなど、緊急時における情報発信のあり方についても対象になるのではないか。

(馬場委員)

- 子供から見た視点で考えることが欠けているように思われる。子供達は、震災及びその後の避難生活の影響により、大変な目にあつた。従って、子供達の避難状況、学校の状況、その後の生活の変化、避難生活に伴う心の健康の問題、ふるさとの記憶の維持の視点を特に考慮すべきである。
- 一次避難から二次避難へ、そして応急仮設住宅への移転といった避難の経過

に関するもの、スクリーニングの実施状況、全国各地に分散避難せざるを得なかった状況や県内への帰還に当たり世帯が分離してしまっている状況、放射性物質の飛散状況とこれによる汚染状況、従前の経済活動が不可能になったことによる損害賠償などに関する記録や資料も残すべきである。

- ・浪江町では、震災遺構を残す手段として実験的に3D映像を活用している。これらも収集・保存すべきである。
- ・仮設住宅を再現することも検討してはどうか。

(小沢会長)

※福島大学うつくしまふくしま未来支援センター歴史資料担当作成のリーフレットに基づき説明。

- ・住民の避難により継承が危ぶまれるものをどのように保護するのが課題である。子供達とふるさととのつながりは継承者に関する課題であり、伝統芸能などは文化の継承に関する課題である。
- ・歴史、文化、自然などの地域のアイデンティティを保持できるようなものを収集することが必要である。
- ・企業やNPO等の活動記録等の収集については、早く手を打つべきであると思う。
- ・収集に当たっては、原子力災害の視点を特に強く押し出してもよいと思う。

(圖師委員)

- ・自分が居住している埼玉県においても多くの方が避難しておられ、その状況を目にすることが度々あった。避難先においてもミニコミ誌等が作られていたかもしれない。避難されていた方々がどのような思いをされていたのか、残すべき情報として重要ではないかと感じた。

(小沢会長)

- ・次に、調査・研究（研究エリア）について検討したい。

(圖師委員)

- ・研究というと専門家の研究がどうしても出てくるが、専門家からの視点だけではなく、地域の方、一般市民の方、小中高校生がいろいろなことで取組んだことも、研究という視点で取り上げられないかと思う。
- ・アーカイブ拠点も何年か経た時点で、地域の方々の故郷の一つにならないものかと思う。そこに行けば自分たちがある時点で考えたことが残っているというような視点でも研究を位置付けられないかと考える。
- ・国際会議や国際シンポジウムの開催など、国際機関との連携、国際的な視点

を考慮することが必要である。

(藤沢委員)

- ・海外からの福島に対する関心は深いものがあると思うので、そのリクエストに応えることができるよう、英語での発信が重要であり、英語に精通した人材を配置することが重要である。
- ・様々な大学で地域連携コーディネーターの活動が進められている。地域のニーズ、シーズを拾い上げることが必要であり、このような視点を持つことをアーカイブ拠点施設に配置する研究者に加えてはどうか。

(中田委員)

- ・資料収集に関して、何のために資料を収集し継承していくのが重要である。原発災害という複合災害を将来の防災研究につなげていくというコンセプトであれば、国内、国外とのネットワークも必要。将来を担う人材という意味で、大学生の研究参加も書き込んではどうか。
- ・震災直後に行政の枠組みを動かすのが難しかったから、民間のフレキシブルなコーディネート力が必要なのは事実。職員としてコーディネート力が必要と考えるのか、その当たりの意味付けは検討が必要と思う。

(小沢会長)

- ・「活用」ということがもう少し言葉として出ていていいのかと思う。地域の伝統や文化の消失や変化のほか、文化の保護、それを活用するという側面として出てくるため、それらを研究等に活用するなどアクティブな要素があっているのかと思う。それらがコーディネーターの活用にもつながるし、新たなアーカイブの面が出てくるのかと思う。

(馬場委員)

- ・生態系への影響というものを加えてはどうか。避難後の動物や植物、川魚など、そういった生態系の研究も一つある。
- ・施設の話であるかどうかわからないが、1000年後に続く拠点という、大きなスケールの中でアーカイブのコンセプトを広げていただけないかと思う。

(2) 施設の構成と組織体制について

(事務局)

資料3及び資料4に基づき、概要を説明。

(藤沢委員)

- ・ コワーキングスペースというのが最近言われていて、今回の施設の中には、様々な研修室やカフェなどがあるが、最近だと、研修室とカフェが融合したような施設がある。従来の施設のような閉じた空間ではなく、オープンな空間を作ると、より多くの方に来ていただける。できるだけ明るい、希望がある場所にしていただきたいと思う。
- ・ 地域連携コーディネーターは、組織で言うと交流担当の役割になるのかと思うが、付け加えると、ボランティアの組織化は、かなり計画的・戦略的にやる必要があるので、経験値をもった方のコーディネートが重要である。

(圖師委員)

- ・ 組織はどうしても施設のエリアという観点で検討されるのだろうと思うが、他のエリアとの横串のような機能があればと思う。
- ・ 情報の発信は、展示及び研究成果のそれぞれにある。先のコーディネーターにもつながると思うが、来訪者からの、このような研究が行われてはいないのかとか、このような研究を行いたいとかいうような問合せに対して、ホテルに置かれているコンシェルジュのような機能が必要なのではないか。

(藤沢委員)

- ・ 何か一つの目的を持たないと来られないのではなく、行ってみるといろいろな動きが見えてきたりと、来る方にもいろいろなことが起きていて行きたくなるような空間作りが大事かと考える。

(馬場委員)

- ・ 今回の施設を造る場合は、迫力、永続性のあるものが必要であり、広島の前爆の記念資料館をしのぐような、年間100万人を超える世界の方々が来てくれるような学べる施設にしてほしい。複合災害は、世界が注目しているので、世界の人々が来て研究・研修する機能も必要。国際会議ができるコンベンションホールも造るべき。世界に発信できる施設でないと、我々の大震災を伝えられない。未来に向かっての復興を伝える施設にするべき。

(中田委員)

- ・ 資料をどう活かすのかのコンセプトが重要。宮城、岩手と違う福島震災の現実を伝えながらどう活かすか。世界に発信していく県民としての使命を、どう繋いで育てていくのかを考えないと、1000年続く施設にはなかなかならない。

- ・ 県民のボランティアスタッフの研修や力量形成のスペースも必要である。

(小沢会長)

- ・ 持続的にということになると、県民の中に我々の経験値を繋いでいくことが重要になる。阪神淡路は都市型の災害。私たちの場合は、自然や文化や歴史、科学の恵みと災害の元凶との関係、ということになるので、いろいろなところにある危険性に関する警鐘を鳴らすものにもなる。最終的には、理念等に反映されながら検討されるべきだが、位置付けに関して更に議論を重ねたい。施設の構成や組織に関しては、現在このように考えているということで受け止めさせていただく。

(3) 中間報告案（一部）について

(事務局)

資料5に基づき、概要を説明。

(藤沢委員)

- ・ 3つほどコメントしたい。
  - 1 拠点なのでハード面の議論中心になるが、ソフト面、どういった研究をするのか、どういった発信をするのか、復興にどう寄与していくのかという部分もどこかに加えてほしい。
  - 2 大きな予算を投じることになるので、持続的な施設になることが重要。
    - ① 変化していかななくてはならない。大きなコンセプトは変わらないにしても、展示や研究や体制は柔軟に変えていけること、変化に耐えうるものにしていくことが重要である。
    - ② 何のためにどんな取組をするのかを検証しながら、マネジメントの観点を強化していく必要。民間の視点も重要と思う。
  - 3 アーカイブについては、宮城岩手などいろいろな団体が取り組んでいる。他の拠点がどんな取組をして、そことどう差別化するか、連携するかを検討いただければと思う。

(圖師委員)

- ・ 情報発信について、ソフト面の仕組みをどう作っていくかが大事。
- ・ ものと異なり、デジタル情報については保持の仕方も検討が必要。一次情報として集約するのか、連携により他機関の情報をこの施設から見られるようにするのか、その考え方により組織体制も変わるし、コストも変わってくる。
- ・ 他機関との連携の枠組も検討する必要がある、これからの課題である。

- ・資料エリアの司書は、図書館のイメージだと思うが、研究エリアについても言えるが、情報発信ができる人、レファレンスに長けた人材も重要である。

(馬場委員)

- ・まだ事故は収束していない。デブリの問題をどうしていくのか、世界の科学者等のための専門的な課題を研究課題に入れていかないといけない。廃炉は30年40年かかるので、どういう解決策があるのか現在進行形のところを入れるべき。

(小沢会長)

- ・直接的には、(アーカイブでは)今の状況をわかりやすく説明するということがかと思う。アーカイブに行けばそれぞれの機関と連携した最新のデータが見られるということは大事である。

(中田委員)

- ・研究エリアについては、最先端の研究をきちんと日本で展開されていて、その英知が福島県に反映されるシステムがあるということを見せられることが大事である。
- ・情報発信の部分も、司書、学芸員のイメージだが、最近のワークショップ型図書館という機能なども考えていくと幅が出てくると思う。
- ・中間報告の構成と目次について、ア～セまでであるが、どういう構成で並べるか、分類するとわかりやすい。

(力丸課長)

- ・並べ方については、項目として出ただけになっているので、更に整理することにしたい。中間整理において何処まで書き込んでいくのかについては、次回までに決めていきたい。

### 3 その他

事務局から、次回会議の開催日時及び開催場所を伝達。

### 4 閉 会